

國語方言に於ける〔ㄷ〕連母音の諸相

藤原與一

本稿は主として現代方言音の上から、連母音〔ㄷ〕に存する諸問題を觀察し、國語音韻史の一端に資せしめんとするものである。

一

初に、私の試みた

- (一) 岡山縣下に於ける各種連母音の實地調査二回（昭和八年）
- (二) 中國・四國・西近畿の方言調査（昭和八・九年）
- (三) 前 實地調査（昭和九・十年）
- (四) 西近畿・中國地方實地踏査（昭和十年）
- (五) 九州、福岡・大分・宮崎三縣實地調査（昭和十一年）
- (六) 近畿地方實地調査（昭和十一年）

の結果に基き、連母音〔ㄷ〕の相互同化・順行同化・及び同化せざるもの各々に就いて、その分布の状態を記述しよ

先づ中國地方に於いて現在我々の氣付き易いのは、所謂「おけ、やま辯」の名によつて概稱せられてゐる所の三備地方の〔e〕の相互同化である。私が最初に注意したのは、嘗て安藝と備後との方言を比較した際に於いて、備後殊にその南部に見出された〔e〕√〔ae〕の相互同化であつた。而もこれは、備後の東南部に一段と旺んであつたのである。「おけ、やま辯」の實體と流布範圍とを確かめんとする私の作業は、備後に於けるかゝる淡から濃への三段階の轉訛傾向を知ることによつて始められた次第である。

扱て、前記調査(一)の、岡山縣下の分布圖によれば、調査語の各々によつて、分布は必ずしも一樣でない。然しそれを重ね合はせてみる時に、略々一定の配布状態を観ることが出来るのである。それに、分布圖にはしてゐないが、別の機會に追補した二回の調査と、彼此の諸調査の都度に爲した副次的な記録とを綜合して考へるのに、岡山縣下に於いては、大體備中備前が〔ae〕√〔ae〕—〔e〕—〔e〕の領域であると言へる。

美作の状態は特別であり、一般には〔ae〕に於ける同化は見えないところと言つてよい様である。殊に東部の英田・勝田の二郡に至つてはその傾向が強い。たゞ、稍々もすれば、作州の南部に當る久米郡南半、及びそれに西隣する眞庭郡南部が、備前・備中の影響を受けてか、往々〔e〕を示すことがあるのである。尤も久米郡の北側に當る津山市附近にもこれが現はれることもあるやうであるが、これは主として南方の地との交渉の別して旺んことに由來するものと思はれるから、今述べようとする分布論上では、特殊の例外的事態と見做しておかなくてはならない。

備中備前の地方に於いても、所によつて轉訛傾向の旺んに現はれる地方と、然らざる地方とがある。概言すれば、

東半によりも西半の方に比較的旺んであり、北半よりも南半の方に一層旺んだのである。備中奥(阿哲郡)の如きも、その南半には相當多く認められるが、北に至るにつれて、次第に稀薄となつてゐる。このことは、本郡の西隣に當る備後最奥の比婆郡に轉訛現象が稀薄なものと、密接に關聯してゐる。(阿哲郡の西半には、備後の方言の影響が、かなり強く認められるのである。)

轉訛の旺んだ地方に於いては、[a]√[æ]のみならず、更に進んだ轉訛段階 [e]√[ɛ]√[ɛ] が認められるのである。即ち、兩備の南部では、一般に [æ] の状態を越えて [ɛ] 又は [e] に至つたものが聽かれる。中にも倉敷附近より岡山地方にかけての地帯は、殆んど [ɛ] のみになり切つてゐると言つてよいほどなのである。たゞ然しその範圍を嚴密に限ることは困難なことに屬する。抑々右の轉訛の推移は、もともと一線上の音訛事象である丈に、その各々の訛音現象の見える所を領域的に劃ることは、出来ないのが當然であらう。それらの領域は漸次に移行し、全體觀の下には、各々主調がかなり明瞭であると言ふのが實際である。そればかりか、一ヶ所に就いて見ても、種々の段階的なものが見出されるのであつて、假令 [æ] の旺んだ地方でも、語音次第では [ɛ] [ɛ] もあり得るのである。單に [e] がよく聽かれると言ふことになれば、倉敷岡山方面に限らず、東は備前の南部特にその西半から、西は備中南部一帯更にその西端から少し北上した近邊までが、さうなのである。同化傾向の強い地方と言へば、この一帯を擧げるべきであらう。たゞこれらの地方は、先の倉敷岡山方面に比し、調査語による [ɛ] の頻出度が少いのであるから、一般に倉敷岡山方面を同化の最も強い地區とすれば、これは第二に強い地域と言つてよいことになる。随つて、前に述べた岡山縣下の [ɛ] 轉訛領域から、これらを除いた殘部は、先づ [æ] の程度のもを主體とする領域とされるので

ある。

註1 それだけ〔e〕又はそれに近いものが多い。

註2 〔e〕への傾きをもつたものもかなりあるやうである。

一體〔e〕と言ひ、〔e〕〔e〕と言ふのも、實は我々の耳に最も強く感じられる所を捉へての表記であることは無論である。實際のものにあつては、音訛過程上の無数の差別相が存してゐるのであつて、殊に〔e〕を中心として、その前後の過程のものが多く様に思はれるのであるが、それらの一々は、餘りにも微妙なため、我々の感覺的辨別力では識別し難いほどである。然し何れにもせよ、作州を除けば他は一般に、〔e〕の連母音が〔e〕又はそれ以上の轉訛を示すのが定期であると言つてよと思ふ。單に語中の、〔ふふ+たふ〕より成る音節に對して母音節〔e〕が直接した場合のみではなく、語頭に母音節が來てそれに〔e〕が接した場合に於いてもさうなのである。

例、 挨拶 [aisatsu] > [eisatsu] > [esatsu] > [esatsu]

轉訛が一つの定則となつて了へば、あとは類推もかなり強く働くことと思ふ。この見地からは、一ヶ所に種々の變化過程のものが、同時に混在し難いとも見られる。岡山縣下に於いて見られる濃淡三段の轉訛層が大體音訛の一定性を有するものとして識別されるのも、その故である。又類推作用の赴くところ、現今新に經驗される語彙に於いても同化が起り得てゐる。かくて發生上かなりの歴史をもつと思はれる相互同化現象は、今も尙完全に繼續されてゐる次第であるが、これが標準音の知識の普及により特異なものとして照出され、昨今漸く訛音の所有者自身によつても、確かな轉訛意識を持たれるに到りつゝあることは、一面に於いて事實の様である。

因みに、當地に於いて、人を冷笑して言ふ際の「わい／＼」の轉訛「ウエーウエー」、「恐い」の「コウエー」にあつてはウ_フは「*wa*」又は「*wa*」であると思はれる。他の連母音同化に於いて、「*wa*」のきかれるものもある。例フエートー（を食）

次にこの現象の東境を探つてみる。一體備前の内でも東へゆくほどこの傾向は薄れ勝ちの様であるが、それにしても最東の和氣郡に於いて同化の見られることも亦事實である。かうなると是非共西播磨地方に當つて見なければならぬことになるが、踏査の結果では格別この方にまでは延びてゐないらしいのである。たゞ特に播磨西南隅の赤穂郡及びその北隣の佐用郡の兩者の西境寄りの村落では、事實存する婚姻關係等のためか、西の「*wa*」の流入を若干受けてゐる様である。かゝる状態に過ぎないから、かの岡山縣下に著しく而も東方に至るに隨つて漸く劣勢ならんとする同化の傾向は、先づ播磨境を以て限られて居ると言つてよいのである。

次には西方の備後であるが、こゝは「*wa*」のみならず、何れの連母音の場合に於いても、備中と全く同一の傾向の見える所である。今は「*wa*」の場合に就いて言へば、阿哲郡（備中）の西に當る比婆郡及びその西の雙三郡（上記二郡は備後北部）には「*wa*」は殆んど無く、南下するに隨つてこれが目立つて來、東南部一劃（深安・蘆品・沼隈の諸郡に至つては、最も旺んでゐる。*

尤も前記雙三郡は、比婆郡とは稍々事情を異にし、「*wa*」への轉訛も間々聽かれる。

*これは前中兩備の南部に〔e〕の多く見えるのと相通するものであつて、〔e〕のみならず、〔i〕程度のものもこの東南部では多く聽かれるのである。以上の如き分布様相よりして、備後の音訛は、備中の現象と全く一聯のものであることが明かに看取せられる。方言の上では、三備地方或は吉備の地と稱して當地方を一括して取扱ふべき點も尠くないのであるが、その一つの根據はこゝにもあるのである。

右の如く、備後東南部に〔e〕の程度のものまでは聽き難いと言ふことは、備後以西の状態を略々推測せしめるものである。即ち該音訛現象は備後の西境を越えてまで西漸しようとする力は殆んど無かつたのである。たゞ備後西隣の豊田郡（安藝東南部）は、一面に於いてその影響の及んでゐる地帯と見られるであらう。

最後に南方への進出、即ち内海島嶼への影響が問題となる。先づ備中では神島・白石島・北木島・眞鍋島の列島の内、最も本土に近接した神島が〔e〕〔i〕を示すのに過ぎない様である。最南の眞鍋島は讃岐系であり、中途の二島では、寧ろ〔e〕〔i〕の傾向が見出されるのであつて、後に述べる安藝以西の事と併せ考へる時に、興味深い分布とされるのである。備後の島では、尾道對岸の向島は勿論のこととして、因島が〔e〕を存し、それに續いての佐木島・生口島・高根島（上記三島は安藝）、更にそれらに繋がる伊豫の弓削島・佐島・生名島・岩城島の諸島に於いても〔e〕が聽かれるのである。尤も伊豫分の島になると、その現象は微弱である。たゞ最末端の岩城島では比較的著しいことが知られるのである。これが更に西南の伯方島・大島（共に伊豫）になると、岩城島と隣つては居るが、〔e〕に於ける如何なる同化現象も通常見えないと言つてよいのである。生口島西隣の大三島（伊豫）でも亦〔e〕は存して

ゐない。然るに、その西の大崎上島(安藝豊田郡)では、大崎南村に〔三〕を存してゐる。この島を一周した際にはかゝる音訛には氣附かなかつたのであるが、右村の小學校の調書にこの音を含んだ語が二三採録せられてゐるわけなのである。事實とすれば恐らくは豊田郡の海岸地方との交渉の關係から來たものと思ふ。大崎上島につゞく大崎下島(安藝豊田郡)の久友村の村誌にも一二語だけそれらしい記載例が見えるが、踏査の際には亦、聽くことが出来なかつた。この地方に及んで來てゐるにしても、恐らく大崎上島までのことであらうし、而も決して一般的な事實ではないと言つてよいやうに思ふ。

以上の島嶼部の記述に於いては、國名が混雜し、本土に於いては安藝は〔三〕の相互同化の認められない所であるのに同國名の島嶼には之を認め得るものがかなりある等の狀況を呈して居るが、これらは島嶼存在の地理的關係からすれば、毫も不思議ではないところなのである。

以上島嶼部の探索によつて、三備を主體とする現象の、南の限界を知ることが出來た。

二

三備の現象は、山陽道全般から見て、實に特異の存在と言はなくてはならないが、西にあつて之を限界附け、且つ對照的に顯著な特徴を示して居るのが、安藝以西の獨自の一傾向である。

先に備中の北木、白石二島に見えた〔三〕〔三〕は、伊豫、大三島及びその西側の屬島からして、それから西に連る所の安藝の島々に、悉く見出される。備中の二島は隔離して存する點から、一つの謎としても、この大三島以西の一團の島々は、それ以東の前述の〔三〕の諸島と大きな對比をなしてゐるのである。

尤も、それらを、「 $[e]$ 」連母音に於ける何等かの同化と言ふ點で一括すれば、それと、同化の起らない「伯方島及び大島」(伊豫と同じ状態)との間に一線を劃すことができ、嘗て私の檢した瀬戸内海島嶼の方言境界線に正に合致する。但し特に伯方島の西半には「 $[e]$ 」もあるから、この島を完全な南方系の地として了ふわけにはいかない。これは尙、他の色々な場合に就いて言へることなのである。

この對比は、直ちに藝備本土の相互關係に想到せしめるのに十分であらう。果して備後に西隣する安藝に於いては、連母音「 $[e]$ 」は順行同化を起して「 $[i]$ 」となつてゐるのである。安藝の東境から強くこの傾向の見えるのは、備後以東の現象と比較して、一見不可思議とも言へよう。

安藝ばかりではない。「 $[e]$ 」の殆んど無いか或は稀な備後北奥には、既に「 $[e]$ 」が見えるのである。安藝最東の豊田郡は、先に「 $[e]$ 」の來及して居る地としても擧げたのであるが、その本色は「 $[i]$ 」であると言つてよい。發生的に考へれば、「 $[e]$ 」等と「 $[i]$ 」とは、全く切り離すことの出來ぬ親近性をもつて居るものと思はれるが、その點からするならば、豊田郡のこの状態及び備後北奥に於ける、「 $[e]$ 」に對する「 $[a]$ 」の接合的な分布は、意味の深いものであると思ふのである。

安藝の全體に見えるこの傾向は、更に周防長門の全面に於いても見ることが出来る。然し注意すべきは、

周防の西部——佐波郡八坂村

長門の中部——厚狹郡小野村

——阿武郡佐々並村

國語方言に於ける「 $[e]$ 」連母音の諸相

——美禰郡大田町

” ” 秋吉村

” ” 別府村

” ” 共和村

——豊浦郡粟野村

に於いて、點々と〔ㄟ〕が聞かれることである。一郡をなして居る周防大島にも同様な現象が窺はれる。

伊豫温泉郡に屬する中島の東中島村にも〔ㄟ〕があるらしく報告されたのであるが、それはこの西隣に當る右の大島と何等かの繋がりをもつた現象であらうか。

かゝる異態の混在は、先に藝東・備北に關して述べたのと同様、意味深い事實であると思ふ。さうして、或は、山口縣下ではかゝる傾向のものがまだ他にも存してゐるのではないかと豫想される所もあるのである。

以上で山陽迄の西端は盡きたわけであるが、〔ㄟ〕の分布はこれに止らない。即ち更に石見に於いても亦、明瞭にその存在を看取することが出来るのである。石見と出雲とは、方言事象の各方面に於いて、尠からざる差異もあるのであるが、〔ㄟ〕に於いて、石見の順行同化が、出雲の相互同化に對應して居ることも可なり著しい差異的特徴である。

石見の内でも、略々その西過半の鹿足・美濃・那賀の三郡は完全に〔ㄟ〕であり、且つ〔ㄟ〕は見出されない。右の三郡の東の邑智郡になると、田所村・市木村・市山村と言ふ、郡の南部から西部にかけての村々に〔ㄟ〕があつて、それらより東の同郡内にはこれを見出し難いやうである。更に、邑智からは北隣に、那賀郡からは東北隣に當る所の邇

摩郡及びその東側の安濃郡では、〔e〕は無いらしい。つまり石見の東部とも言ふべき畿上の地方では〔e〕のまゝのやうである。出雲の相互同化とは別箇のものであることは勿論であるが、石見の一般とも異つてゐる次第である。但し安濃郡では、海岸の鳥井村に〔e〕が聴かれる。一體この郡は、何かにつけて出雲の影響を蒙ることが頗る多いのであるが、これもその一つであらう。尤も安濃郡の大勢としては、〔e〕のまゝの状態が普通と見られるから、この石見東部地方は、大凡〔e〕のまゝの地方と見て差支へないであらう。

石見一國を〔e〕∨〔e〕の地方として概括してゐる人もあるやうである。調査の地點及び調査そのものにも依ることであらうが、私は一先づ、自分の經驗の範圍内に於いて報告をする次第である。或は精査によつては今少し東寄りになるまで〔e〕が見出されるのではないかとも思はれるが、先年邑智郡東隅の都賀村に立寄つた際には〔e〕は何等聴くことが出来なかつた。

之を大觀するならば、石見一國は略々安藝と同じ傾向であると言つてよいかと思ふ。邑智郡の、南部より西部にかけての〔e〕の存在の如きは別して意味深く、安藝の現象と石見のとの連繫を考定することが一段と容易である。石見東部に〔e〕が無いとしても、〔e〕の方へは轉訛しなくて〔e〕のまゝであることは、石見、出雲の對比と言ふ大きい觀點からして、恐らくは〔e〕の傾向に、より親近してゐるものと解せられるのである。かくて石見全體が、安藝は勿論、周防・長門とも同時に、一括して考へ得る對象となるわけである。これは單に〔e〕連母音の問題だけに止らなす。この〔a〕∨〔ae〕の音訛の見える範圍が、一般の方言事象の分布に對し、有力な一基底面を示してゐることは、否み難いところなのである。それは恰かも三備の國々に於いて、〔a〕∨〔ae〕∨〔e〕∨〔ae〕の現象が、これらの地方を方

言分布上の一區域として考へるべき根據の一を自示してゐると同様である。

三

三備の東側に於いては、三備の現象と如何なる對比をなすものがあるだらうか。先づ注意されるのは、この方には三備とその西域との間に見えた様な密接な交錯關係は無いと言ふことである。即ち先の二領域は何らかの同化を示して相互に縁の深いものであつたが、三備に對する播磨に於いては、同化のことは起らないのが普通であると言つてよいのである。

こゝに同題となるのは、奥播磨の各峡谷である。昭和十年夏の踏査では、

播磨神崎郡越知谷村 [ai] > [ae]

" 飾磨郡鹿谷村 [ai] > [ae] [ai]

" 宍粟郡西谷村 [ai] > [ae] ?

" 奥谷村 [ai] > [ae] 極稀

の様な状態が、夫々の地に見出されたのである。それに、佐用郡の北峽にある平福町にも同様の現象があるらしい。これらからすると、北播磨には、ある範圍に亘つて、[ae] 又はそれに近いものが見出されるのではないかとも思ふ。

四

次には、出雲に對する石見の前述の状態からのみならず右の奥播磨の状態からしても、山陰一帯への討究が、順序として要求される。

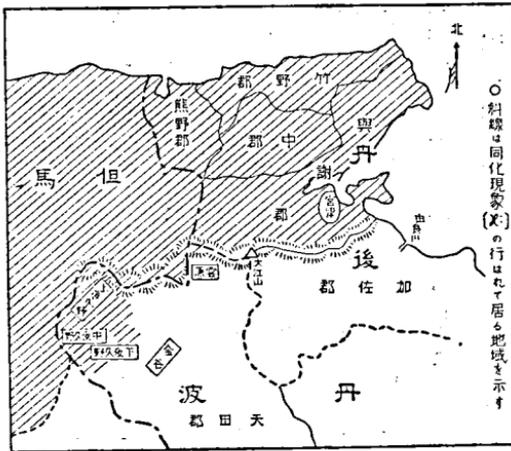
先づ出雲に於いては、相互同化が極めて顯著であり、全體に亘つて〔a:〕∨〔e:〕の變化が見られる。但し飯石郡の南部（赤名町・來島村・頓原村・志々村）は、例外とされる。扱てこゝに注意すべきは、〔e:〕に對して短呼の〔e〕の併存することである。これは三備地方では全然見られなかつたものである。出雲の特徴としては寧ろ短音のものを擧げるのが妥當であらう。次に〔e〕も亦島根半島一帯、今市附近、奥出雲の仁多郡等に於いて聽くことが出來たのである。これで當地方にも亦、三備地方と概ね同趣の音韻變化が見られることになる。このことは、隱岐の島前・島後に就いても言へる。但し短音〔e〕は、出雲ほどに著しくはないやうである。

出雲・隱岐のこの傾向は、石見東部の安濃郡邇摩郡邑智郡（東半）、及びそれに連なる出雲飯石郡南部の各々に亘つて見える所の〔a:〕の不同化と關聯させて考へなければならぬ。さうして特に安濃郡に於いて、鳥井村〔e〕にも見えると言ふことは、重要視してよいことと思ふ。これらを中間に置いて考へる時に、出雲、石見の異つた同化の方向はやがて統一的に解釋せられることになるであらう。

次に出雲東側の伯耆・因幡を見る。この一帯では、〔a:〕∨〔e:〕又は〔e:〕〔e:〕の變化が全般に見出される。特に伯耆西部の西伯部では、短音の〔e〕が頻りに顯はれ、出雲との緊密な關係を示してゐる。

出雲より因幡に至る一聯の傾向は、更に東隣の但馬全般に於いても見られるのである。その同化が〔e:〕にまで至つて居るかどうかは疑問であるが、因幡に最も近い美方郡の邊に〔e:〕程度のもの存することは確かかやうである。然し一般には〔e:〕であらう。さうして西伯部を除く鳥取縣の概況と比較すれば、但馬の方が〔e:〕に勝つて居り、且つその内部での方處的變化も、より複雑なものではないかと思ふ。さうして先述の奥播磨の同傾向は、これら山陰側の

傾向の滲透したものではないかと思ふ。山の脊梁を隔て、相互に通じ合ふ場合のあるのは、特殊の状態ではあるが、かゝる山地部には往々認められることであり、今言ふ地域にもまた、中國山脈の頂上線の兩側に言語の交渉相通のかなり濃厚なものとあることが、踏査の際に知られたのであるから、滲透かと観る右の見解も、強ち不當なものとは言へないであらう。



その他の同化は何等見えない。

扱て以上の如くであるならば、我々は山陰にも亦、相互同化の長大な地帯を認めなくてはならないのであるが、さ

うなると、但馬より東の状態がどうなつて居るか、即ちこの傾向の東の限界如何が問題になつて来る。この探査は、等しく近畿地方には地を占め乍らも、播磨はもとより近畿一般のそれとは別様の型式を有する但馬アクセントが、それ以东ではどうなつて居るかとの追求と問題性を二にする。果して兩者の結果も亦鮮やかに一致したのである。

但馬のアクセントは、近畿アクセントとは餘程乖離する所の多い中國アクセントの流を、直接くむものである。

即ち今は同化に就いて概括すれば、

丹後の熊野・竹野・中・與謝の四郡に互つては、概ね普遍的に〔*re*〕が発見され、同じく丹後ではあつてもその最南に位する加佐郡には、〔*ra*〕

と言ふことが出来るのである。圖示すれば右の如くである。

同化現象は、先づ、大江山を中心として東西に走つてゐる山梁の、北麓まで及んで居るものと見るべきである。大江山以西の山梁の南麓は、丹波の天田郡になつてゐるが、ちやうどそこに位置する雲原村に就いては、多少議論の餘地がある。然し結局は北側の興謝郡に包括して考へるべきではないと思ふ。又天田郡の、但馬に突出した部分、即ち上夜久野・中夜久野・下夜久野の三村は、所謂、後但馬、前但馬からの言葉の影響が強いためからかして、皆多少とも〔*ei*〕を存してゐるのである。就中北部の上夜久野が最も明瞭にそれをもつて居り、下夜久野に至つて薄弱になつて居る。そこから隧道一つを東へ抜ければ金谷村であるが、こゝ以東になると、最早〔*ei*〕は聴かれず、同化のことは他にも何等存しないのである。随つて西端三村の〔*ei*〕現象は、丹後のとは没交渉のものであることは明かであると言つてよい。故にこれは丹後に於ける限界線の問題からは除外すべきものである。以上によつて、大江山梁（即ち加佐・天田兩郡の北境）の兩側が、夫々明かにされたのであつて、こゝに該線を以て〔*ei*〕分布の限界線と認める次第である。而してこれは殆んど疑ふ餘地を残さないであらう。

右の記述は、昭和十年八月月上旬に、アクセントを主題とし、これと關聯して音韻・語法上の事實も取扱つて、同地方十八ヶ所を踏査した際の結果に基くものである。尤も道々でも絶えず簡単な調査をすることに努めたし、人の意見も聴くことが出来たから、常識的には尙かなり多くの地點に就いての調査を了したことになつてゐる。特に問題となるのは由良川口より宮津附近にかけての状態であるが、今はその交錯相に就いての解説を省略する。根本的な問題ではなく、起原の明かな局部的の事態と認められるからである。

五

以上述べるところによつて、中國地方及びこれに接續する近畿西北部地方に一定の領域を以て存する同化事象の分布が明かにされたと思ふ。然らば、右の範圍を除いた近畿全般の事情はどうなのであらうか。これに對しては、先にも播磨が西隣の備前地方に似ず大體不同化の地と見られた如く、又丹後の〔き〕の限界線の南側の加佐郡に同化の見えないことが明かにせられた如く、おしなべて〔e〕の同化は見えない所であると観ることが出来るのである。たゞここに明かな例外の地とされるのは、大和南方の十津川であつて、こゝには〔e〕√〔a〕の順行同化を存してゐるのである。これに關聯しては、十津川村附近の吉野郡一帯及び紀伊・南部伊勢・志摩の諸地方、即ち畿南の地の内に幾らかは同種の傾向が発見せられはしないかとも、關西地方の方言事象各般の分布の上から疑はれる點があるのであるが、未だ確證を得てゐないので保留するの外はない。一體十津川は言語の島として近畿地方中での異域と認定され勝ちなのであるが、これは必ずしも真相ではないやうであり、近畿地方の南方及び東傍一帯の言はゞ非近畿的脈絡が、そこに特に強く露出するに至つたものに外ならないかと解される場合が尠くない様なのである。随つてその見方からは、〔ai〕√〔a〕が、私の現在までの調査に於いては、十津川にのみ存するかの如くであると言つても、直ちにこれを孤存の事實と決めて了ふわけには行かないのである。

轉じて四國地方を見るのに、これ又一般に不同化の地方であつたのである。尤も四國西南部は、必ずしも他の四國全般に一括せられるべきではないかに觀られる節も無いではない。

不同化の地と見られる近畿四國の一般に就いても、一應の注釋を必要とする點がある。先づ〔ai〕の連母音に終る

形容詞にあつて、その語が感嘆的な表現に供せられた場合に、例へば、

ナガ—!! (長い)

棒線はアクセントを示す

の如く發音されることがあるのである。「熱い」のに驚いて「アツ—」と發音するのもこの類である。然しかくの如きは全く特別の場合に屬するものであり、而も實は近畿地方アクセント及びそれと同系の四國地方アクセントの圈内に於いて特に易い特徴なのである。一面から言へばこのアクセントあるが故に、かゝる發音もあるのであり、隨つて一般には、このアクセント體系に即しては〔e〕はそのまゝに發音されるのが當然であると言つてよいのである。それにしても右の場合以外に〔e〕√〔e〕の生じ得ることがある。殊に形容詞の場合にさうであり、稀には特殊な名詞の場合にもあるかも知れない。然しさう言ふ場合は、近畿四國にあつては、その地としての一般的な法則性をもつた轉訛事實ではなく、全く偶然の一事象に過ぎないのである。か様なことは〔e〕の相互同化の旺んな地域の中にさへも存することである。それだけ〔e〕から〔e〕への轉訛は容易であるらしいことが、十分推知し得るであらう。次には〔e〕√〔e〕の變化も亦、極く稀には四國・近畿の中に存し得たのである。これとても、僅少の語例に偶發するだけのものであり、それも或は轉訛意識の殆んど無い場合さへあるらしいのであつて、その地の一般的な傾向として捉へるべくもないことなのである。要するに、單なる二三の事例のみではなくその他の一般性乃至通有性として認められる同化又は不同化の傾向を問題として居る我々にとつては、近畿四國は、共に不同化の地域と觀るべきなのである。

内海島嶼の内、淡路島は播磨以東と、小豆島及び鹽飽諸島(及び特に備中の眞鍋島)はその本土たる讃岐と、大島・伯方島(全部ではない)・中島(大部分)はその本土たる伊豫と、夫々同系であるから、これらも亦、不同化の所とされるのである。(以

國語方言に於ける〔e〕連母音の諸相

上の諸島を除けば他の内海島嶼はすべて何等かの同化現象の領域とされることは、前述の如くである。

然るとき、我々は、中國及び近畿一部の同化地帯に對して、この近畿大部及び四國の傾向を、興味深い對照としてうけとることが出来るであらう。この内四國は、海を隔て、離存してゐる關係上、他と何等か相違點を有するであらうと言ふことは常識的にも豫想し得るところであるが、近畿大部分が中國地方と接境的對立をなしてゐることに、一應は、全く不可思議の感を抱かざるを得ない。かくて更に中國の西に當つて見なければならぬのである。

六

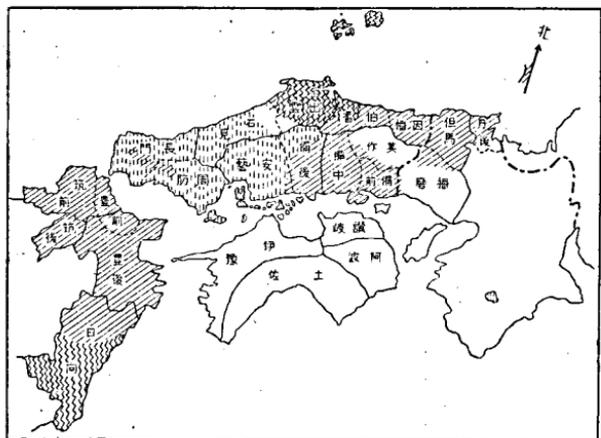
九州に就いては、中國四國との關係を觀ようとして、先づ東傍三縣の方言調査を試みたのであるが、その内、今の問題に關しては、同化の著しい状態を捉へることが出来たのである。而も近接の中國西部三縣の順行同化には似ないで、かへつてそれ以東と同様の相互同化が發見されたのである。即ち筑前・筑後・豊前・豊後及び日向北二郡に於いては、明瞭な〔ɛ〕〔e〕の音訛が萬遍に認められる。尤も三備或は但馬丹後に旺んな〔ɛ〕は、筑後西方の一部にあらしく、豊前南端、豊後の東北及び東南の各一部にあるかも知れないのを除いては、先づ殆んど無いと言つてよいのである。九州當地方の以上の如き状態は、特に出雲・伯耆・因幡地方に酷似してゐる。次に〔ɛ〕〔e〕の短音であるが、先づ筑前の南部、筑後の一部及び豊前南方の一部、豊後國東半島の一部に、或は存してゐるかも知れない。併し現在の所では、その存在を俄かには信じ難いものゝやうである。これが最も明確に分布する所としては、日向の中部以南を擧げなくてはならない。我々は、先に出雲地方に於いて見ることの出来たのと同種の轉訛事實を、そこから遠く離れたこの所に又發見することが出来るのである。さうして、特に注意すべきは、出雲に於いては〔ɛ〕と共に

〔e〕も強く認められたのに、この地では、殆んど〔e〕の一式であることである。〔e〕も無いことはない。殊に日向北部の〔e〕の地域と、中部以南の〔e〕の地域との接合する所、即ち主として日向中部の兒湯郡の如きは、恐らく兩傾向の衝合混在するところと観て差支へないのである。又一般的に考へても〔e〕∨〔e〕の存し得る所であるならば、現在の新しい事實として〔ai〕∨〔e〕も生じ得る可能性は極めて濃厚である。随つて常に、〔e〕の地域に〔e〕をも豫想することは比較的容易であらう。然し我々がこの種の土地を問題にする時には、特に〔e〕を注意すべきなのである。さうしてこの場合も、〔e〕本位に考へれば、出雲との間に前述の如き差異が見出されるのである。

日向のこの傾向は、鹿兒島縣下一般の此の種の状態に全然同じであり、薩隅にはむしろ日向に於けるよりも以上に明確に短音〔e〕が流布してゐることが推知された。残る肥後・肥前は全く未調査に屬する爲、私自身の見地からは何等論及することが出来ない。たゞ熊本縣玉名郡賢木村には〔e〕の存することが、手許の報告書に見えてゐるのである。

七

以上記述する所によつて、同化の分布を一覽圖にして示せば、大凡次の如くである。

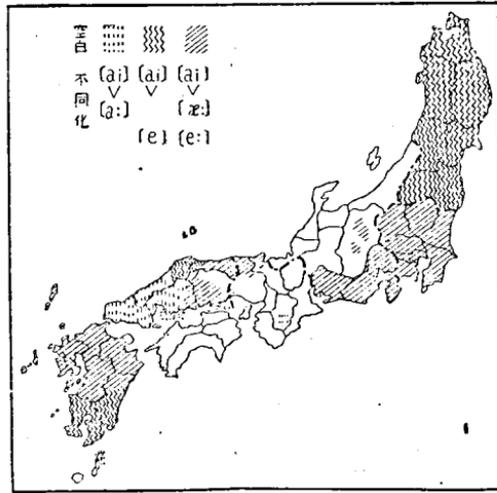


八

次には管見に入つた既刊方言資料によつて、右圖に示す所以外の状態を探り、これらをまとめて全國に於ける分布の概況を圖示してみよう。

- ▨ [a]の相互同化([a:] [e:] [e:])の存する地方
- ▤ [a]∨[e]の短音の存する地方
- ▧ [a]の順行同化([a:])の存する地方
- (空白) 同化の存しない地方

九州に於いては、先の圖にとり残された所もすべて相互同化の存する所とされてゐる。その内、薩隅は〔a:〕∨〔e:〕であり、壹岐と對馬は〔ai〕∨〔e〕なのであるが、肥前・肥後には〔ai〕∨



〔ai〕の轉訛が見られるのである。尙、肥後の一部には〔e〕の短音も存するらしい。筑豊地方の〔ai〕∨〔e〕に對して、その西側の肥前肥後に〔ai〕∨〔e:〕の、〔e〕にまでは至らない轉訛段階のもの見受けられるのは注目に價する。更に、獨り種子島に於いては、特に〔ai〕∨〔ai〕が旺んなのである。ともあれ九州には、全般に亘つて何らかの音轉訛が存すると言つてよいのである。(1)

これに關聯して南島を見るに、一般には〔ai〕∨〔e〕(或は〔e])の轉訛が存する所とせられてゐる。然し、宮古方言に於いては、〔e〕音には絶対に轉じないのが特徴であると言はれてゐる。又その先の八重山群島も、波照間島の〔e〕及び石垣島南岸の白保村の〔e〕(稀例)を除いては、亦、不同化の地とみられてゐる。扱てかゝる同化の状態は、薩隅の〔ai〕∨〔e〕であるのと較べ合はす時、若干の疑問無きを得ない。(2)

國の西南隅と對蹠の地位にあつて、而も同種の傾向を廣く存するのが東北地方である。(3)尤も金田一博士によれば、その音價は〔e〕なのであるが、(これを享けた方言文献も尠くない)、今、〔e〕の相互同化の轉訛過程を問題とする時は、〔e〕を中心とするその前後の諸段階と、〔e〕及び之に近いものとの二つを大きく考へることが出来るから、

〔æ〕に對しては、〔æ〕は餘程〔æ〕に近いと見ねばならず、随つてこゝでは〔æ〕をも廣義の〔æ〕と解しておくのである。尙、東北隅の青森縣には〔æ〕〔æ〕が報ぜられてゐる。

東北と明瞭な區劃をなす筈もなからうが、關東地方になると〔æ〕〔æ〕が通則となつてゐる。但し千葉の山武郡には、別に〔æ〕〔æ〕の轉訛もあることが報ぜられてゐるのである。

關東に續いては、駿遠に〔æ〕〔æ〕が見られ、三河が又これだと言つてよいのではないかと思ふ。尾張に入れば岡山と共に有名な〔æ〕である。三河については、手許に適當な資料が殆んど無いため、何とも言ひ難いのであるが、〔æ〕が尾張の範圍を出でないらしきのと、三河に「ナゲー」(長イ)等の例の見えて居ることより推すに、大凡尾三の間に〔æ〕〔æ〕、〔æ〕〔æ〕兩現象の境界があるのではないかと思つてゐる。黒田鑛一氏が、

要するに尾張と三河とは語法に單語にアクセントに語調に種類を異にすると認むべきもので、三河は直音清音に、

尾張は拗音濁音にとの感もする。(愛知縣に於ける方言分布の研究 國語と國文學昭七、十號、及び愛知縣方言集)

と述べて居られるのは、参考とするに足らう。

關東西側の甲斐には〔æ〕〔æ〕最も多く、〔æ〕が之に次々と報ぜられてをり、又信州上田附近にも〔æ〕〔æ〕を見る。後は必ずしも上田附近に限るものではないであらう。即ち信濃の國にはまだ外にも〔æ〕〔æ〕の存する所があるのではあるまいか。長野市及び上水内郡、諏訪に存することは事實のやうである。駿遠より三河にまで〔æ〕〔æ〕の存してゐることから考へるのに、これは、關東方言並びにそれと同系の方言領域に、普通ならば廣く見られる筈のものではないかと思ふ。換言すれば、〔æ〕〔æ〕は、元來東國方言の通有性かも知れないのである。然し西の飛驒・

美濃になると、明かに同化は見出されないのである。⁽¹³⁾ さうして、若狭より越後に至るまでの北陸道諸國にも、[a] >

以上参考文献の主なもの

(1) 放送講演集九州方言講座 九氏 (昭和六年)

九州方言重母音アイの轉訛に就いて 池邊巖川 (土の香六週年紀念號、昭九)

壹岐島方言集 山口麻太郎 (昭五)

佐賀縣方言語典一斑 清水平一郎 (明治三十六)

南島方言と九州方言との交渉 宮良當壯 (國學院雜誌 昭六)

種子島方言について 井上一男 (廣島方言學會座談會稿 昭九)

(2) 方言、「琉球語特輯號」(四ノ十、昭九)

南島方言資料〔言語誌叢刊第一期の内〕東條操 (昭五)

八重山語彙 宮良當壯 (昭五)

國語音韻論〔言語誌叢刊第二期の内〕金田一京助 (昭七)

日本文法新論 金澤庄三郎 (大正元)

(3) 國語音韻論 金田一京助

國語研究、「特輯東北方言號」(二ノ四、昭九)

國語方音に於ける [a] 連母音の諸相

青森縣方言集 青森縣師範學校（昭十）

（4）青森縣方言に於ける音韻現象 菅沼貴一（方言三ノ二、昭八）

（5）關東方言地圖 東條操（昭十？）

（6）千葉方言〔山武郡篇〕 塚田芳太郎（昭九）

（7）静岡縣方言辭典附音韻法 口語法 男女兩師（明治四十三）

（8）愛知縣方言集 愛知縣女子師範學校（昭九）

（9）山梨縣方言の諸相——資料篇—— 山田正紀（昭九）

（10）上田附近方言調査 上田中學校國漢科（明治四十）

（11）長野市及び上水内郡方言集 佐伯隆治（方言四ノ十一、昭九）

（12）諏訪語特徵語一斑 笹岡未吉（方言四ノ一、昭九）

（13）岐阜縣方言集成 瀬戸重次郎（昭九）

北飛驒の方言 荒垣秀雄（昭七）

（14）福井言葉（方言繪葉書）（方言三ノ二、昭八）

加賀ことば（同右）（同右）

金澤地方方言のこと 尾山篤二郎（方言三ノ五、昭八）

越中方言の位置 田村榮太郎（國語と國文學 四十一號、昭二）

富山市近在方言集 同右(昭四)

越中高岡地方の謎と方言 磯邊忠雄(方言二ノ十二、昭七)

國定教科書方言訛語の調査卷一(高岡方言) 同右稿

新潟方言二三 吉田澄夫(方言一ノ二、八、昭六)

越佐方言考初稿 小林存(高志路一ノ五、六、八、九、昭十)

九

右掲の分布圖は、連母音〔 e 〕の同化又は不同化の諸種の場合よりなる方音の對應を、統一的に示すものに外ならない。我々は、方言の間にかく共時的に見出される音韻變化によつて、逆視的に〔 e 〕に關する音韻史を歸納することが出来るであらう。これを共時體系の通時的展開と名附けるならば、こゝにこそ、國語方言學の獨自の一領野とそ
の方法が見出されるのである。

先づ第一に、國土の西南と東北、及び出雲地方に〔 e 〕〔 e 〕の存することが深す注意される。今日に至るまでの日本民俗學及び日本言語地理學的實驗によつても既に、國の遙かな兩端に遠く一致するものが存してゐて、而もそれは我が國民の生活史或は國語史の比較的、或は最も、古い部面を物語るものであることが、幾らかづゝ實證されて來たのであるが、今の〔 e 〕〔 e 〕の分布に就いても、同様の考へ方から、これが就中古い歴史性をもつた音訛である様に考へたいのである。即ち嘗て國の中央部に始めて生じた〔 e 〕〔 e 〕の變化は、やがて四周に波及し、遂に國の端々まで推及されるに至つたのであるが、その後起つた新しい事情のため、國の多くの部分は、重ねて侵蝕せられて

新事情の領域となり、かくてより古いものは中央語を距ること最も遠い處に残存するに至つた次第であるかも知れない。所謂方言周圍論はこの場合にも適用し得るのではあるまいか。我々は、現下の周邊分布を以てして、嘗ては國內に廣く〔a〕〔e〕の存してゐたことを想定することが出來、〔e〕連母音の同化に關する限り、短母音の〔e〕が最も早くより存してゐたことを知り得るのかと思ふ。

出雲地方の〔e〕〔e〕の存在は、これの全国的に存し得てゐたことを一層明瞭ならしめる意義深い分布と言はなければならぬ。九州の南部が〔e〕〔e〕の短音であるのに比し、南島が長音であることは、大きな疑問とされる所であるが、凡そ〔e〕〔e〕の存する處は同時に〔e〕〔e〕をも生じ得る條件を具備してゐるものと言つてよいのであるから、何らかの事情により、〔e〕〔e〕の後に、又更めて〔e〕〔e〕を生じ、かへつてこれが全體を被ふに至つたものと解されるのである。さうして南九州とは離れて特に南島だけが、この變化を起した點に、かへつて南島の獨自性があると言つてよいのかとも思ふ。

而して、文献の國語史料の上では、語音に長母音が現はれたのは室町時代とされてゐる。然らば、〔e〕〔e〕のまゝの状態も、恐らくはかなり後まで保たれてゐたとされるのではあるまいか。宛も方言に於いては、かゝる長期間に、十分全国的な周布を成し遂げ得たのだと思ふ。

〔a〕〔e〕の現在の分布の有する意義は紋上の如くであるが、奥羽の津輕南部二國、九州の大隅薩摩二國の各問題の地域には、尙他に現在旺んな、多種の場合の短音傾向が覗はれる。これらによつて推考するのに、古代に於いては、或は一般に短音現象強く、〔a〕〔e〕はその一つの顯れではないかとも想像せられるのである。

古代に於ける〔e〕〔e〕が果して〔e〕の相互の同化によるものであるか否かは、一應吟味して見る必要がある。近代の轉訛事實からすれば、相互同化の結果は一旦長母音になるのが極めて自然な現象かと思はれるが、それが短い母音である所に問題が伏在してゐる。これが〔e〕〔e〕の過程を経たものであるかどうかは俄かに實證し得ない。寧ろ直ちに短母音を生じたのではないか。こゝに脱落と見る見方も生じ得るのであらう。即ち〔e〕の一方が落ちる代りに他方を自分に引き寄せて落ちて行つたと見ることである（金田一博士、國語音韻論一三七頁）。然し相互同化と同時に長母音の短音化があつたものとも見られる。この場合は嚴密には短音化とは言へないであらう。東北、九州の方言の〔ai〕〔e〕に就いても、今の説明に短音化と言ふのはよくないのであつて、短音として傳存せられたものと見るべきであると思ふ。若しそこに〔e〕もあるとすれば、それは後から發生したものであつて〔e〕の前身としての〔e〕の殘存とは解し難いのである。右の二つの見方は、要するところ、〔e〕〔e〕兩者の相互牽引と言ふ點で一に歸する。結果から言へば、〔e〕と〔e〕との融合に外ならない。故に一括して同化と言つてよいかと思ふ。然し同化と同時に短音を生じたのは餘程特殊な變化と見ねばならない。隨つて同化の名よりも融合と呼んでおく方が、常識的には一層穩やかな様に思ふのである。

十

周圍論的に言へば、〔ai〕〔e〕の分布に次ぐ改新波は、〔ai〕〔e〕、〔ai〕〔e〕及び〔ai〕〔ai〕の諸同化事象であ

つたとされることになる。一方は九州から中國及び近畿の一部に、他方は關東地方より中部地方にかけて、夫々存するこれらの分布は、全く國語の中心地の兩側彼此に對存し、而も各々〔e〕∨〔e〕の分布領域に接觸して、新らしい第二次周圍の事實を明瞭に示してゐるかの様である。先には極めて長期間に亘るかと思はれる〔e〕∨〔e〕の時代があつたが、次には今述べる傾向のかなり長い時代があつて、以て現代に達する。即ち〔e〕同化の音語史は大きく二期に分つことが出来るのである。

その第二期の傾向即ち同化による長母音の生成は何時頃からであらうか。中央語に於ける長母音發生の歴史は、橋本進吉博士によれば、

平安朝に於ける音變化によつて、「る」「へ」「る」「ひ」「ふ」「を」「ほ」等の音節がその子音を失ひ、又所謂音便によつて種々の音節がイ、ウなどになつた爲、二つの母音が並ぶやうになつたものも少くない。これ等の相並ぶ二つの母音が、平安朝以後に於て合體して、一の長母音となつたものがある。(岩波講座日本文學所收、國語學概論(下) 一五一—一六頁)

とて、先づ〔ou〕∨〔o〕〔eu〕∨〔jo〕二種の變化が比較的早く起り、

以上二種の變化は比較的早く起つたものらしく、院政鎌倉時代に於いては、この兩種のoは同音であつたやうである。(前引書一六頁)

とあり、又、〔au〕∨〔o〕∨〔e〕〔大體室町時代の終まで〕∨〔o〕が生じたとされてゐるのである。地方に於ける、〔e〕からの長母音の發生も亦、上引の諸傾向と相前後するものではあるまいか。之に關して重要な資料を提供するものは、

葡萄牙人耶蘇會士ロドリゲスの編述した日本文典（大文典）中の、國內諸方言に關する記事である。

○「一六〇八（慶長十三）日本大文典の增訂成り、三卷全部刊行せらる」土井忠生先生、ジョアン・ロドリゲス年譜。（國文學攷第二卷 第二輯）

この年代が、次下に述べる地方の諸種の音變化の時代附をなすのである。

○以下の大文典からの引用文は、國語科學講座所收の「近古の國語」所載の土井先生譯文及び橋本進吉博士「三百餘年前の日本の方言に關する西人の研究」（民族二ノ一）中の譯文による。

ロドリゲスは、肥前及び九州の大部分に就いて、

肥前でも、又此の下の大部分でも、A又はOの次のIは、その發音に甚悪い一種の響を伴ふEに變ずる。例へばシエカイ（世界）をシエカエ、好イをヨエ、甘イをアマエ、大事をダエジ、タイシエツ（大切）をタエシエツ、フィロエ（廣い）をフォロエ、黒イをクロエといふなど。

と述べてゐるが、これによれば、「下」即ち九州の大部分は〔æ〕〔ɛ〕の程度であり、〔ɔ〕が〔æ〕になつたわけ、同化の兆は見えるとしても、完全に同化と言ひ得る程度には至つてゐなかつたものと見なければならぬ。随つて、尠くともロドリゲスの頃までには、相互同化による長母音〔æ:]〔ɛ:]〔ɔ:]等は未だ九州に無かつたとされるのである。

註 「肥前でも」と特にとりたて、言つてゐるのは、事實肥前にその傾向が甚しかつたからのことではなく、就中熟知の所であつたが爲に外ならないであらう。今日の状態からは、さう解するのが穩當である。

それに比すれば、中國の〔a〕〔b〕は相當成音化してゐたらし。

中國の者は、發音する際、ひろがりを過度にする。即ち、口を過度に開いて、一種の高い響を與へる。例へば、*narumai* の代りに *narma* とス。

と述べてゐるのである。但し彼の言ふ中國とは、山陰を含まないものだらう。假令含ませた上の言説であつたにしても、それは想像に過ぎなかつた筈である。事實に於いて彼は山陰地方に歩を運ぶことはなかつたからである。ただ山口などに於いて、山陰人士の口を聞き得ることもあつたとすれば、その想像にも幾らかの確實性は期待し得る。強ひて善意に解釋すれば、山陰の石見だけは、山口にも比較的近い關係上、人を通して同國に〔a〕〔b〕の存することを知り得てゐたかも知れない。然しこれらは全く今からの單なる推察に過ぎないのである。次に山陽側に於いても備前までは中國と言ふ中に含ませてゐない様である。それは備前の條に、

一、打消のザルを用ゐる事中國並に豊後と同様である。

と言つてゐる用語によつて知られるのである。

中國に次いで豊後も、

一、この國のものも、やはり、ひろがりを過度にする。さうして、その物言ひには、世によく知られた野鄙な響がある。

と述べてゐるから、等しく〔a〕〔b〕の轉訛が見られたのであらう。尙、中國と豊後との關係に就いては、右につゞけて、一、中國に於ける如く、打消動詞ザルを用ゐる。習ワザツタ、上ゲザツタレバ、シエザツタのやうに。

と言つてゐる。元來ロドリゲスに於いては、豊後と對して中國と言つてゐても、それは殆んど中國の山口との比較が中心になつてゐたのであらうが、何れも熟知の土地であつただけに、これらの觀察も當つてゐたことであらう。

同じく因縁の深かつた土地として注意される備前についても、果して又委しい記述があるのであるが、それにしても、連母音〔*ei*〕に於ける音變化の有無については一言も説く所が無いのは、注意すべきことである。既に「下」の大部分について觀察したこともあるのだから、もし備前にこれが存してゐたのであつたならば、早速彼の耳にもとまつた筈ではあるまいか。然るに今こゝには何の記述も無い。こゝに於いてか我々は、恐らく當地方には、〔*ei*〕に於ける音變化は未だ兆してゐなかつたのであらうと想像せざるを得ないのである。尤も備前とは言へ、ロドリゲスの經驗に入つた所は、當時海港として榮えた内海の要衝、下津井あたりであつたことと考へられるが、其處は勢ひ多方の人々の混淆する處であり、且つ、土着の人にも讃岐に出自をもつ漁家が相當多かつた筈であるから、その中にあつて、備前方言の特徴の中核を捉へることは、旁々困難であつたであらう。〔*ei*〕の變化に就いての記述のないのも或はその爲かとも一應は察せられる。然し、備前の特徴として別に擧げた、

一、打消のザルを用ゐる事……

一、嬉^{ウシ}シユーニ存^{ゾク}ズル、珍^{ウツ}シユーニ御座^ゴル、茶^チアツニ(熱うに)立^タテイなど。

の如きは、今日の状態より見るに、當時の讃岐などの語法としてはうけとり難いから、彼とても、下津井の、讃岐人又は讃岐系の人の言葉を、備前のものに誤り観た様なことは萬々無かつたであらうと思ふ。同じく備前の條の、最後の鼻母音に關する説明でも、

さうして、この一筆者註(鼻母音を捨てた)發音をするので備前のものは名高い。

と特に斷つてゐるところもある程なのである。且つ、讃岐は、今日でも、阿波の傾向に類して、西部に方言鼻濁音(私の聴き得た例は卵、鏡の發音)を存してゐる所がかなりあるから、當時はこの國にもそれが尠くとも現在以上に、旺んであつたかとも思はれる。この傾向は鼻母音の傾向に通ずる性質を有つてゐる。随つて彼が備前に鼻母音は無いとしてゐる以上、それは下津井の讃岐人などを、誤つて對象としての備前方言觀察などではなかつたことが窺はれるのである。かくの如くであるから、ロドリゲスは確かに備前の實相を捉へてゐたものと見得るであらう。故に〔e〕の音變化も、知らなかつたのではなく、事實無かつたのであらうと解せざるを得ないのである。

備前に關聯して考へられるのは、「關東又は阪東」に就いての次の一記述である。

一、三河から日本の涯にいたる東の諸部に於ては、一般に語氣荒く、鋭く、多くの音節を呑み込んで發音せず、且つその地の人々相互の間でなくては了解せられぬ、獨特な異風な語が多い。

三河から以東を一括して問題とし、尾張についてはこゝにも他にも觸れてゐないことが注意せられる。彼によつては三河は、明治の國語調査委員會によつて歸納された東西二大方言の境界線が南・遠の間に在るのとは異り、東國方言の内に包括せられたのである。随つて尾張は三河から切離されてゐるのであるが、かゝる觀察の内にも、尾張に於ける〔e〕の音變化の存否には何等言及してゐない所をみると、こゝにも未だ〔e〕〔e〕〔e〕等はおろか、〔ae〕も起つてゐなかつたのかも知れない。尤もロドリゲスの東國往來の途次には、伊勢海を渡り、爲に尾張については親しく多くを知る機會に乏しかつたのかも知れないが、一方備前に相互同化の兆さへも認めてゐない所からすると、そこ

と同様の事情によつて生じたと思はれる尾張の〔e〕も、或は未發であつたかと思ふ。かくて、三備・近畿西北部にせよ、尾張にせよ、現今〔e〕等の旺んな地域は、ロドリゲスの當時に於いては、未だ顯著な變化を、一般には生じてゐなかつたかと解せられるのである。

三河以東については、

一、直接法の未來形には多く助辭ベイを用ゐる。たとへば、参リマオースベイ、上グベイ、讀ムベイ、ナラオー
(習ふ)ベイなど。

と言ふ記事もあるのである。〔e〕の音變化についての直接の記載は無いが、所謂ベイ〈言葉の先蹤が當時認められたとすれば、〔e〕の相互同化の傾向も、これと前後して或は兆し始めてゐたのではないかとも想像されるのである。

以上はロドリゲスの説く所によつて知られる當時の共時状態であるが、これも今日の〔e〕轉訛の分布に比較するとき、かなり相違してゐることがわかる。即ち慶長の十三年頃までには〔e〕の何等かの同化は、國內全般としては未だ訛音生成の略々初程にあつたことが知られるのである。偶々ロドリゲスはこの交にあつて國內諸地方の比較觀察を爲したため、その益する所は尠少でない。就中、〔e〕の相互同化の結果長母音を生ずる二途の、分岐の次第を、我々に知らしめる所があるのは、没すべからざる功績である。即ち彼は、中國及び豊後については *naruma* の如く〔ai〕〔e〕の順行同化の傾向を認め、同時に九州に於いては、相互同化の事前の段階と目される〔ai〕〔ae〕の變化を認めてゐるのであつて、これより、國語方言に於ける兩種同化成立の先後は、大凡決定されるのである。

十一

ロドリゲスの時代に於ける各地の状態は、その後如何に變化進展して行つたであらうか。次にはこれを現在の事實(既述)の上から追證してみよう。先づ九州に於いては、「下」の大部分を領した〔e〕〔æ〕は、その後、筑豊地方に〔ai〕〔e〕〔æ〕の變化を逐次生ぜしめ、終に最も明瞭な〔e〕を分布せしめるに至つたのである。然るに肥後肥前では、〔e〕の程度にまでしか至らないで今日に及んでゐる。

中國地方の所謂〔e〕〔æ〕は、「發音する際ひろがりやを過度にする。即ち、口を過大に開いて、一種の高い響を與へる」と言ふ〔e〕音化の初期の状態から、漸次、口を過度には開かず、隨つて高い響の伴ふことも少い發音に固定してきてたのである。〔ai〕〔æ〕轉訛の完成と言つてよ。

豊後の〔e〕に就いても同様なことが言へる。但しこゝに於いては後にこれが消失し、遂に現在では〔ai〕〔æ〕の音訛を最も普通とするに至つてゐるのである。因みに明治三十五年刊行の大分縣方言類集によれば、

コガースル (動) 斯様ニスルヤト云フ意 (北) 漁業地

ドガースル (動) 如何程ニスルヤト云フ意 (北) 漁業地

の二例が拾はれるのであるが、ドガー、コガーは〔togaɪ〕〔togaɪ〕〔kogaɪ〕〔kogaɪ〕の如き成立に係はるものであるから、これが北(豊前分に屬する)の漁業地から採集されたところをみると、ロドリゲスは言はなかつたが、豊後と共に、豊前にも〔e〕があつたのではあるまいか。今日に於ける兩國の密接な親近性に徴すれば、その想像はゆるされるかも知れない。尤も今では〔e〕〔æ〕はなくて一般に〔ai〕〔æ〕であり、右の例語ならば、ソネースル、コネースルと言ふのが普通らしい(前引「九州方言重母音アイの轉訛に就いて」による)。さうして我々は、右の刊年を有す

る當地方言集に、問題の例語が僅に二箇存するに過ぎないことによつて、これらの國に於ける〔e〕衰亡の時期を、極めて大まかにならば推定することが出來よう。

豊前豊後の〔a〕∨〔e〕の明瞭な現狀に徴すれば、ロドリゲスが〔e〕の發音を認めた所の「下の大部分」と言ふのも、*o*を認めた豊後を除くが故に大部分と言つたものとは解さない方が穩當であらう。豊後と雖も、*o*と共に相互化の傾向もかなり早くから存してゐたのでなかつたならば、今日の結果を將來する筈はなかつたやうからである。且つ今日豊後・豊前の兩方言が互に近似する所の甚だ多いのからしても亦、ロドリゲスの昔に於いて特に豊後を豊前から離してまでも特立させねばならなかつた事情は、容易に想到し難いのである。惟ふにわざ／＼「下の大部分」と斷つたのは、よし幾分かは豊後を除外する意志も手傳つてゐたにせよ、多分は、彼が南九州に關して無經驗であつたため、やはらかく言表はさうとしたものであらう。

次に東國地方であるが、恐らくこゝも、九州よりより遅くない頃に〔e〕∨〔e〕の變化を生じたであらう。江戸語及び現代の狀態に徴するに、この地方の〔e〕は他の何れの地方にも劣らぬ程に、轉訛の跡を脱却し切つた發音であると思はれるが、それだけに、もと／＼早く音訛を始めたものかと思ふ。

ロドリゲスには知られなかつた山陰地方も、出雲・伯耆・因幡には、今日、九州筑豊地方と同程度に旺んである〔e〕が聽かれるが、恐らくは、九州のと略々同じ經歷をもつものであらう。國の中央にはより近くとも、方言周圍論的に言ふならば、言語波の及び方は山陽よりも遅く、大體九州地方と同時的乃至繼起的と解してよいことは、〔a〕∨〔e〕の、南九州と共に出雲にも存してゐることによつても明かなやうである。方言諸相に關する自製の幾らかの分布圖か

らも九州と山陰との方言系統線が歸納し得られることは、此處に参考となるであらう。

三備地方、近畿西北部、及び尾張方面の〔e〕〔ɛ〕は、一先づ、ロドリゲスの觀察以後に於ける新しい發生に屬すると言つて置くの外はあるまいか。既に〔ɛ〕の起つた後は、〔ɛ〕〔ɛ〕の推移を生ずるのは自然の成り行きであるが、三備地方の一部を除いては、多くは〔ɛ〕を主としてゐる様である。その音價の別は如何にあるにもせよ、これらの地域に、他地方には遅れて、同化を見るに至つたのは、何故であらうか。この發生の地域と時期には重要な問題がひそんでゐる様に思ふ。先づこれらの地方が、目下〔ɛ〕の同化を存する處としては、中央語に最も近く、而もこれよりも以内の地方には、(特殊地を除き)最早や、〔ɛ〕の同化の領域は存してゐないと言ふ事實が著目される。即ちこれらの地方は、〔ɛ〕に於ける同化の生じ得る處としては、都中心に言つて最内限度の處だつたのである。これ以内の不同化の地と云へば、近畿方言乃至近畿アクセントの領域に外ならない。かく、現在から見ても後に發生した〔ɛ〕の同化の地が、近畿方言乃至近畿アクセントの直接外傍地帯であつたと言ふことが、〔ɛ〕に於ける同化現象の、國內諸方言に於ける、時代差ある複雑な發生の事情を、よく暗示してゐると思ふのである。

中央語に於いて〔ou〕、〔eu〕、次いで〔au〕の各々に、同化が起り、その結果長母音が生成されたのであるが、連母音〔ɛ〕に於ける同化も恐らくは亦その大勢と、契機を同じうするものであつたのである。然るに一方、中央に於いては、エイ、レイなどは〔e〕〔ɛ〕と發音し、長母音〔e〕〔ɛ〕となる様なことはなかつたのである。一般に〔ɛ〕がその前に來る母音と合體して長母音となる事は無かつたと言つてよい。それにも拘らず、地方に於いては、ロドリゲスの頃——國に長母音を生じてさほど間も無い頃——に、事實〔ɛ〕からして長母音が、一は發生し〔ɛ〕、他のもの

は發生せんとしつゝあつたのである。(ae)かゝる中央、地方の差別は何に基くものであらうか。私見を以てすれば、これはアクセントの地方的な相違と結びついてゐるところが甚だ大であると思ふのである。即ち中央語の内、換言すれば近畿アクセントの法則性の下にあつては、その型式上、[e]に於ける[e]と[ɛ]との間の區分性又は各音素の獨立性が當然強く、こゝには二者の融合は何ら生じ得べき餘地もなかつたのに反し、近畿アクセント以外のアクセントの下にあつては、右のとは正反對の事情により、連母音兩者の融合が正に可能であつたのである。換言すれば、中央と地方とに於ける紋上の差別は、互に内質を異にする各アクセントの必然性と密接に關聯して當然生れた結果に外ならないかと思ふのである。この見解の妥當なことは、一つには三備・近畿西北部及び尾張の同化領域と、近畿の不同化領域との境界が、近畿アクセントと然らざるアクセントとの境界に合致してゐることが自證してゐるだらう。又、近畿アクセントの領域内と觀られるもの但馬の中國的なアクセントも入つてゐるかと思はれる所の奥播磨に、既述の如く多少とも[a^h]、[e^h]又は[ae]が認められるのも、右の一つの證明になるだらう。四國全般が不同化の地であることも、近畿アクセントと同系のアクセントを有する處であるが故に、正に當然のことゝ解されるのである。北陸道に就いても、大體能登・越中までは近畿アクセントの影響を認めることが出来るから、四國と同様に、同化の見えないのを當然と解してよい。その他の不同化地たる越後(佐渡を含める)・飛彈・美濃は、右の如き近畿アクセントの東北への脈絡によつても想像される様に、一般に近畿方言の影響があつて、よしその混入したまゝのものには十分には認められないにしても、近畿方言と東國方言との接衝の結果、中間的な性質の域帯をなすに至り、隨つて依然

[e]の同化を生ずることはなかつたのではないかと思ふ。若し精査の結果、飛彈美濃地方に於いても同化が発見され

るとすれば、近畿の不同化が明瞭な今日、アクセントとの關係から言つて益々理想的な説明が出来ることである。

註1 吉田澄夫氏はその「新潟方言二三」なる論稿に於いて、「新潟方言について感ぜられることは、關西方言の要素が多分に存すると言ふことである。これはひとりこの港町の方言に限つたことでなく、新潟縣一帶の方言の特色であるが、その原因を如何に考ふべきであるか。北の海岸線に沿うて山形縣の酒田邊まで關西方言の影響が見られるといふことは不思議な事實である。尙新潟方言における東北方言の影響も語法や單語などには多少見られるが、音聲に於いては少い。」(方言一〇二)と述べて居られる。

一方橋正一氏によれば、「越佐方言に於ける近畿語の要素」(高志路一ノ五、六)を指摘した後、「越佐方言は東北方言である」(同誌一ノ八)と断ぜられてゐる。右の兩論は共に徹底的な調査によるものではないから、我々としては一先づ何れにも真相の一斑を認めておくべきであらう。越佐方言の真相は自らこの間に示されて居ると言つてよいかと思ふ。

尙、裏日本一帯は、中央語の活潑な周布によつて消極的に築かれた方言の一大系統線とも見られるところがあるから、單に、固定した近畿方言が東北方へも影響して行つたと言ふ様な靜的な解釋にのみ捉はれてはならないであらう。

註2 このことは既に國語調査委員會の分布圖が證明してゐる。東條操先生の方言地圖は、廣く中部地方全體を東西兩方言の間の衝地帯として居られる。

註3 石見の東部は、既に述べた如く、その西側の〔e〕〔æ〕と、東側の〔e〕〔æ〕との間にあつて、不同化のまゝである。かくして先掲の全國分布圖に見る如く、近畿を中心として東西に斜に長く不同化の領域を存し、國の中央を差措いて残る兩側の各全體に同化を生ずることゝなつたのである。

之を要するに〔æ〕に於ける同化は、中央に於ける〔ou〕〔œ〕〔au〕等の同化(長母音の生成)の傾向と略々同時代

に生じたのである。強ひて言へば、〔e〕の同化が稍々他に遅れて生じたかも知れない。その發生は、〔e〕/〔o〕の如き同化を拒否した近畿アクセント及び同系アクセントの領域並にそれらと關係のある地域以外に於いてはあつたが、生じた地方に於いても、地方地方により、自ら發生し遅速があつたのであり、近畿アクセントの影響から遠い處には、かへつて早く之を見た様である。さうして〔e〕の同化を拒否する近畿アクセントの領域に最も近接し、その影響を受けることの多い處に、遅れてこれが發生を見るに至つたのは、正に當然であつたのである。〔e〕の同化の、近畿兩傍に於けるかくの如き後段的發生は、この發生が單なる偶然ではなく、實に生じ得べくして生じ難かつた所に遂に生じたものであることを、よく示してゐるものと言つてよい。随つて兩傍の發生の時期も、殆んど同時代であつたやうと見るのが至當かと思ふ。現在これらの地域に、他の何れの地に於けるよりも、轉訛過程明瞭にして最も活潑な〔e〕の程度の訛音が旺んに現はれてゐるのも、これが發生の遅さ、及び兩傍のその發生の同時性を、よく反映してゐるものと思ふ。

上來ロドリゲス以降に就いて述べた各地の諸變化が、全體として今日見る如き分布の大勢を決するまでに進展し切つたのは、比較的新しいことであらう。同化の古い出發點をもつ九州の肥後肥前に目下尙〔e〕を存してゐること、豊後豊前の〔e〕の消失が近い先の頃の事實であること、三備の或る地區に見える〔e〕〔e〕が近代の轉訛に屬し、現在尙、〔e〕への推移をたどりつゝある語例の多いこと等々よりして、さう考へられるのである。

十二

最後に問題となるのは、何故に〔e〕が先の分布圖に見るが如き配布状態をとるに至つたかである。一體〔e〕から

は〔æ〕の方向へも〔æ〕へも轉訛し得る可能性が十分に存してゐた。山口縣下の〔æ〕の中に多少の〔æ〕が認められ、千葉縣山武郡の〔æ〕中に〔æ〕も認められるのはその故であり、備後の奥に、ダイテ(出して)等の〔æ〕の語例があつて、南隣の備後中部南部に〔æ〕、西隣の安藝に〔æ〕が存すること(僅かならば備後の奥にも〔æ〕〔æ〕が混在して居る)、及び石見の東部に、〔a:〕〔e:〕二領域に挟まれた〔a:〕のままの處のあること等も亦、右の事情を物語つてゐる。然し〔æ〕の轉訛の結果生じた〔æ:〕及び〔æ〕〔æ〕〔æ〕は、その間に口の開きの大小を存してゐるから、一地に同時に〔æ〕と〔æ〕類との二系列が派生することは普通には考へられ難い。このことは廣い地域の上について言へることである。而して口の開きの大きい〔æ〕が先づ發生し易かつたことは、理論的にも當然なことである様に思ふ。當時〔æ〕よりは先に轉訛したと思はれる〔a:〕〔æ〕〔æ〕の開音オーが、永く室町時代の終まで大體保たれてゐた事實は、〔æ〕の相互同化の内にも、〔æ〕の調音力の殘存することが比較的強かつたことを證してゐると思ふが、之を換言すれば、連母音の同化に於いては廣母音の支配力がより大であると言ふことである。この點からも、先づ順行同化の起るのが、發音作用の自然であつたと言へるのである。ロドリゲスは實際にこの事實を目撃してゐる。

〔a:〕〔æ〕の轉訛が右の如き性質のものであるならば、〔a:〕〔æ〕の方向の轉訛は、特に〔a:〕の〔æ〕の調音力の殘存性も相當強く、遂に〔æ〕をひきつけんとする作用を起すに至つた結果、相互に融合したものと解される。故に二種の同化方向の分岐點は、結局〔æ〕の性質如何に依存したのである。こゝに又、アクセントとの密接な關係が豫想される。即ち先づ安藝・周防・長門・石見の一圓に於いては、そのアクセントの性質上、〔a:〕の〔æ〕の分立性比較的弱

く、之に反して今見る〔e〕〔æ〕の地方では、その所有のアクセントの性質上、〔e〕の各母音の分立性が比較的強く、遂に現在の如き〔æ〕と〔e〕〔æ〕との、分布領域の對比を將來したと解されるのである。

更にそのアクセント差の基くところは、方言事象全般の根底に求めなければならぬ。こゝに一般的な把握として地方的基質なるものが考へられるであらう。これが成立事情については、斯の稿の目的上、こゝに委しく考へることをゆるされない。今はたゞ〔æ〕領域の成立、それについて〔e〕或は〔æ〕を主とする領域、及び不同化の領域の相關的繼起的成立が、すべてアクセントの、夫々の地方に於ける性質と密接したものであることを指摘すれば足る。

註 それは、語の音韻體制中に於ける〔e〕〔æ〕兩者の緊張關係が、當該地方のアクセント性の相違によつて、地方地方で異なるのと言へるかと思ふ。

ロドリゲスも氣附いた如く、九州東北部に中國と同じ性質の存したのも、こゝに九州の他の何れの地方よりも明瞭な、中國アクセントと同系のもの存することによつて容易に首肯され、山口縣下に〔æ〕の多少存することも、九州との連繫に基く所の現象として了解せられるのである。近畿地方に於いて、たゞ十津川附近にのみ〔æ〕を存することも、こゝが中國の〔æ〕の地方と同様のアクセントを有するのを知ることによつて、一應了解せられる。その點から言へば、備中の二島に〔æ〕のあること(既述)は殆んど問題とするに足らない。たゞ種子島に至つては、俄にその〔æ〕存在の所縁を明かにし難いのである。

以上縷説する所によつて、〔e〕連母音の音韻史は、單に中央語史としてではなく、國語の全體史として大略あとづけられたかと思ふ。

十三

本問題の外延性は甚だ大である。即ち、こゝに要領を記述した、〔e〕の同化諸相及び不同化の地方々々に於ける相互の分立對比、聯關、交合等の一切の領域的相關々係は、單に〔e〕連母音のみの問題たるに止まらず、國語の方言事象一般に存する根本傾向を、端的に反映せしめるところがあつたのである。

この問題が決して局部的な問題に止まらないことは、これと他の〔o〕〔e〕等の連母音の同化とが密接に聯關してゐること、奥丹後に於ける〔e〕〔i〕の領域とそれ以南の〔e〕のまゝの領域との境界線が、兩種アクセントの境界線であることは勿論、同時に又〔e〕の存せざると存するとの差別を示す重要な境であること等の卑近或は顯著な實例に徴しても明瞭である。

我々はこの〔e〕に關する方言分布の事實によつて、國語諸方言の成立過程を追證する上に、多大の便宜を得るであらう。諸方言の分布と系統とは、或る程度までこゝに暗示されてゐると言つてよいのである。南九州と北陰との連繋性、更に東北との一致、近畿地方の四國との關聯及び北陸道との關係等は、その最も刮目に價するものである。而して最後に同化の領域と不同化の領域との大なる對立に看到し、而もそれが二大アクセントの性質差に對應してゐることを發見し得るに及んでは、深い注意を拂はざるを得ない。こゝにこそ國語發達史に於ける根本問題が存してゐるのである。國語諸方言の比較歸納により逆視的に國語史再建を試みてゆき、特徴ある方言分布の事實を深く探るとき、遂に國語の史的展開の上に二つの流れとその領野とを認めるのであるが、その大きな徵證は、實にアクセントなの

である。國語全體としての發達の問題は、所詮アクセントの問題に歸するかとさへ思はれるほどである。近畿アクセントと然らざるもの（東國的アクセントと假稱しておく）との相反並存は、國語史上の究極の問題である。然るに今や、この〔シ〕連母音の問題に就いての討究によつても亦、よくこの根本問題にまで到達し得たのである。かくてこれは、單に音韻上の一問題たるに止まらず、大きく、國語の發達變遷の基本的動向の問題にまで發展せしめられるべきものであることが知られるのである。

（昭和十二年五月二十二日）